

特集

建築のまちを
旅する 07

三春

大高正人が寄り添い
描いた故郷の未来





表紙の写真

〈三春交流館「まほら」〉外観

設計 | 大高建築設計事務所

大高正人が建築の造形表現において最大のテーマにしたのが屋根だ。ここは段葺きの大きな傾斜屋根で、軒の高さを周囲のまちなみに合わせている。古木の風合いのある焦げ茶と真砂土色の外壁タイルも、景観との調和を意図したもの。右手前の休憩コーナーは、休館時も住民が利用できるように専用の出入口を設けている。大高が生前最後に設計を手がけたこの建物では、まちや住民への深い配慮が随所に見られる

[写真:石田 篤]

左写真

〈三春交流館「まほら」〉

天井裏から見た「まほらホール」

設計 | 大高建築設計事務所

高度な音響エンジニアリングをもとに設計された「まほらホール」。音響に望ましいポリシリンダーを壁や曲面天井に全面的に用い、その手前にルーバーを設け、音響の形と視覚的な形の共存を図っている。音の反響をふまえて設置されたルーバーは間隔が一定ではなく、広いところと狭いところがある。また、日本で初めて吸音カーテンを利用した残響可変システムも採用。カーテンの上げ下げによって残響時間を1.2~1.8秒の間で変えられる。また、照明の取替え用の階段を計画に盛り込むなど、メンテナンスを見越した設計がなされている

[写真:石田 篤]

LIXIL eye no.19
2019年6月20日発行

発行 | 株式会社LIXIL
編集発行人 | 早川氏幸
LIXILジャパンカンパニー
TH統括部
〒100-6007
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング7階
Tel: 03-6273-3635
Fax: 03-6273-3742
制作 | 株式会社フリックスタジオ
デザイン | 株式会社ラボラトリーズ
印刷 | 竹田印刷株式会社

* 本記事の無断転載を禁じます

* 本文中の敬称は省略させていただきました

次号『LIXIL eye』no.20は、
2019年10月発行予定です。

『LIXIL eye』のバックナンバーは
インターネットでご覧いただけます。
<http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/>

CONTENTS

特集

04 建築のまちを旅する | 07

三春

06 テーマ1

大高正人が寄り添い描いた故郷の未来

ナビゲーター | 岩田 司

10 三春町歴史民俗資料館・自由民権記念館／三春町民体育館／三春交流館「まほら」

14 テーマ2

山間のまちに溶け込む蔵 改修・転用で人を呼び込む

18 三春建築めぐり

22 住宅クロスレビュー | 07

設計のルール

手嶋 保「井の頭の家」×高橋 堅「姫宮の住宅」

32 建築家の〈遺作〉 | 04

吉阪隆正「三戸町目時の農村公園」

談 | 齊藤祐子、嶋田幸男

36 新世代・事務所訪問 | 07

中川エリカ建築設計事務所

ナビゲーター | 門脇耕三

44 構造家の新発想 | 07

部材断面に宿る構造の本質

多田脩二

48 触覚デザイン | 04

白井晟一の階段手すり

ナビゲーター | 笠原一人

52 土木のランドスケープ | 07

首都圏外郭放水路

ナビゲーター・文 | 八馬 智

58 Design + Technique

箱根本箱

62 TOPICS

災害関連死ゼロを目指した「命を守るトイレ」

文 | 杉浦 功

65 INFORMATION

LIXILからのご案内／展覧会＋イベント／LIXIL出版 新刊案内

68 紙上の建築 | 07

Deep forest for grasshoppers

市川創太 (ダブルネガティブスアーキテクチャー、都市研究室エイチシーラボ)

三春町のメインストリート「お祭り道路」の「四ツ角」と呼ばれる交差点周辺。歴史的にもこのあたりが中心地で、かつて会所があった角地に、現在、「三春交流館『まほら』」が立っている。その背後に見える山に三春城があった。このまちなみに「まほら」が軒を連ねるため、ホールを大屋根に収めつつ低層事務所棟の奥に配置して、周囲に馴染ませている。通りの電線は地中化され、街路灯は郷土玩具「三春駒」をモチーフに石井幹子氏がデザインした【写真：石田 篤】

日本三大桜のひとつ、天然記念物の三春滝桜がある地として有名な福島県の三春町。山に挟まれた谷筋に沿って市街地が伸びる小さなまちだが、戦国時代からの城下町に由来する武家地と町人地の構成が残り、神社仏閣も多く集まる。こうした地域の特徴を活かした意欲的なまちづくりの取組みが、1980年代以降に始まり、現在まで続いている。その先導役として大きな役割を担ったのが、このまちに生まれた建築家の大高正人だった。彼の足跡をたどりながら、桜だけに終わらない三春の魅力を見つけていこう。

三春

特集 建築のまちを旅する 07

テーマ1

大高正人が寄り添い描いた故郷の未来

ナビゲーター | 岩田 司 (東北大学教授)

取材・文 | 長井美咲
写真 | 石田 篤 (特記以外)



大高正人

おおたか・まさと

1923年、福島県田村郡三春町に生まれる。東京大学大学院修了後、前川國男建築設計事務所を経て、1962年、大高建築設計事務所を設立。2010年に逝去。略歴はp.09参照

[写真：相原 功]



01 | 三春ダム管理所・資料館 (大高建築設計事務所、1994・1995)

ダムは三春町の南に広がる丘陵地にある。手前が管理所、ダム湖に突き出るように立つのが資料館。管理所は独特の外観形態ながら周辺環境になじんでいる。資料館も、湖面側に設けたシリンダー状の展望テラス、周辺のなだらかな山並みのスカイラインに溶け込む屋根形状など、周辺施設の修景計画や隣接の管理所と一体となった景観づくりへの配慮が見られる [写真：小松正樹]

建築家として、さらに都市計画家としても活躍した大高正人。設計を手がけた建物は竣工したもので150を超え、そのうち4つが出身地の福島県三春町にある。三春ではまた、“緑の下の力持ち”として、亡くなるまでの30年にわたりまちづくりを手伝った。

ナビゲーターの岩田司東北大学教授は、そのまちづくりに約40年前の学生時代からかかわり、2000年からは三春に居を構えるほど、このまちに深く根を下ろす。大高とも交流のあった岩田教授の案内のもと、大高が故郷に描いた未来を知ろう。

阿武隈山系の西裾の谷間にある三春町の中心部まで、郡山駅前から車で30分弱。途中、大高作品のひとつ「三春ダム管理所・資料館」⁰¹に寄ってから、まちのランドマークである「三春交流館『まほら』」⁰²を目指す。交流館から「三春町歴史民俗資料館・自由民権記念館」⁰³には歩いて行ける。これらも大高作品だ。

このまちが三春と呼ばれるのは、梅・桃・桜の花が一斉に咲きそろうから、というのが通説だ。三春には日本三大桜に数えられる「三春滝桜」や、町内に約2,000本のシダレザクラがあり、4月は多くの花見客でにぎわう。町名の由来にはもうひとつ、平安時代に坂上田村麻呂が蝦夷征討の最前線基地として小高い山に見張り台をつくったから、という説もある。岩田教授は「歴史的な経緯を見ると、“見張る”説のほうが正しいのではないかと思います。三春城跡の城山公園からは確かに周囲をよく見渡せますから」と話す。

諸説あるが、戦国時代に現在の郡山市守山あたりを拠点としていた田村氏が築城して、三春は城下町となった。しかし、それ以前から、海沿いのいわきと内陸の会津を結ぶ塩の道と、白河から尾根伝いに二本松に抜ける奥州姫街道の交点に形成された

宿場町として栄えていた。そのため「武家より町人が良い場所を押さえていました」と岩田教授。中心市街地を歩くと、その面影を感じることができる。

江戸時代の後期から近代にかけては良馬の産地として名を馳せ、明治時代の初めには「自由民権運動」の東日本における中心地として全国に知られた。「田舎の城下町としては珍しく、三春の人は言いたいことをきちんと言い、人前で議論することを厭わない。民権運動が盛んだった土地柄だけのことはあります。明治期から昭和初期にかけては生糸の集積地で、商人たちは横浜まで卸しに行っていたから進取の気風にも富む。神戸出身の私にも付き合いやすいまちです」。

前川國男に出会うまで

大高は1923(大正12)年、このようなまちで生を受けた。父は福島県庁に勤め、高い役職にあったが、祖父から多額の借財を引き継いだため、大高が少年のころの家庭環境は貧困に苦しんでいたという。祖父は民権の学塾「正道館」に入り、「加波山事件」⁰⁴の際も家を出たものの、家人に連れ戻されて加担しなかった。しかし、事件後は収監された同志の支援に奔走し、その家族の面倒も献身的に見続けた。借財はそのために負ったものだった。

「この祖父が与えた精神的な影響はきわめて大きかったようだ、というのが家族や周辺の人的一致した見方である」という記述が書籍『建築家 大高正人の仕事』(荻原 敬・松隈 洋・中島直人著、エクスナレツ



02 | 三春交流館「まほら」 (大高建築設計事務所、2003)

ホワイエは多目的に使えるように広めのつくり。また、外の交流広場からホワイエ、客席可動式で平土間のまほらホールまでがすべてフラットで、一体的な利用も可能。窓際に並ぶコンクリートの柱は表面をはつって、大高作品によく見られる意匠だ

シ、2014)のなかにある。大高は都市や農村の問題に積極的にかかわり、建築と社会を結ぶことに努め、人生の後半は都市デザインやまちづくりに軸足を置くようになった。その生涯に見られる社会思想や、現実の社会にしっかり向き合う姿勢は、祖父から受け継いだものかもしれない。

大高は旧制福島中学校から旧制浦和高等学校を経て、1944(昭和19)年、東京帝国大学(現・東京大学)第二工学部建築学科に入学。本当は東京美術学校への進学を望んでいたが、浪人中に太平洋戦争が始まったことから両親の説得もあり、進路を変更して建築を志した。

東京帝国大学の第二工学部は、戦時体制下において軍事産業を支える工学者や技術者を養成するために、1942(昭和17)年、千葉市に開学。東京本郷の工学部と千葉の第二工学部のどちらに進学するかを学生自身が選ぶことはできず、抽選だった。

両者の校風は大きく異なった。第二工学部は自由な雰囲気、建築学科の教員には新進気鋭の学者が集まっていた。また、学生の多くは寮で生活し、学科を越えて活発な交流があった。

とはいえ戦争が終わるまでは空襲に怯え、工場に学徒動員される過酷な日々だった。そんななか、大高はル・コルビュジェの作品集に触れ、著書を読み、彼の建築思想に惹かれていく。そこに登場したのが、設計演習に外来講師として招かれた前川國男⁰⁵だ。1947(昭和22)年の大学院進学後は、大学院の教育・研究システムが整っていないことから前川の事務所に通って設計の実務を学び、大学院修了後は正式な所員となる。

転機となった世界デザイン会議

前川のもとでは、「神奈川県立図書館・音楽堂」(1954)、「晴海高層アパート」(1958)、「東京文化会



03 | 三春町歴史民俗資料館・自由民権記念館 (大高建築設計事務所、1982)

敷地は町役場の裏手にある小高い丘の中腹で、山の多い三春の地形を損なわないよう建物は丘に半ば埋め込まれている。大高の頭のなかには、三春によく見られる、谷筋を走る街道から階段を上って神社に辿りつくイメージもあった。右の写真は2階の休憩室

館」(1961)など、戦後の前川の代表作を担当した。これらの仕事を通して、コルビュジェの建築思想と方法を、彼に師事した前川がどう咀嚼し、どのようなかたちに実現していくのか、そのプロセスを知った。

大高の前川事務所時代で興味深いのが、東京文化会館を設計中の1959(昭和34)年に、「副都心・上野計画」を自主提案していることだ。その趣旨文では、コルビュジェが手がけたインド・チャンディガールの計画などを例に挙げ、都市計画家と建築家に分断された時代が終わり、都市設計家ともいべき人々の時代がくると興奮気味に書いている。大高は同じ年に、東京湾の海上都市計画も発表。菊竹清訓が「海上都市」を発表したのもこの年で(「塔状都市」は前年)、60年代を目前にして、建築家たちが都市に強い関心を寄せていたことがわかる。

大高の場合はさらに、個々の建築とその総体としての都市との関係についての問題意識を伴った。これは前川に感化されたもので、前川は常々、「多様な建築が、混乱した手を付けられない都市をつくっていくのではないかと」危惧していた。大高はのちに、「千葉県文化会館」(1967)を設計したときに「千葉文化の森計画」を立案し、同じく自身の設計による「千葉県立中央図書館」(1968)と文化会館を公園で関係づけ、上野計画の設計思想を実現している。

ところで1959年は、大高、菊竹、黒川紀章、槇文彦らが翌年東京で開催される世界デザイン会議⁰⁶に向け、「メタボリズム・グループ」を結成した年でもある。この会議で大高は槇と共同で、「群造形」論のもとづく「新宿副都心計画案」を発表した。その命題は、コルビュジェや前川の都市思想をベースに、時間的な変化に対応できるシステムを提案するというものだったが、大高は「会議でコルビュジェの夢がさめた」とのちに語っている。

発端は、会議で交流する機会を得たポール・ルドルフやルイス・カーンなどの建築家から、「日本には



04 | 加波山事件

1884年に起こった、三島通庸等の暗殺未遂事件。福島事件で当時福島県令だった三島の弾圧を受けた県内外の青年民権運動家たちは、その暗殺を志して茨城県の加波山で拳兵決起。参加者20人余りのうち5人が三春出身者だった。拳兵は失敗して彼らは逮捕され、死刑や無期徒刑などの厳罰に処せられた

05 | 前川國男

建築家(1905-1986)。新潟市生まれ。東京帝国大学工学部建築学科を卒業すると同時に渡仏し、ル・コルビュジェのアトリエで学ぶ。帰国後はレーモンド建築設計事務所を経て独立し、日本のモダニズム建築を牽引した。主な作品に「京都都会館」「東京文化会館」「埼玉県立博物館」「熊本県立美術館」「福岡市美術館」がある

06 | 世界デザイン会議

1960年に東京で開催された日本初の国際デザイン会議。坂倉準三を代表に、柳宗理や亀倉雄策、丹下健三といった当時の建築・デザイン界の主要人物が中心となって開かれ、「今世紀の全体像 デザイナーは未来社会に何を寄与するか」をテーマに討論。20数カ国から200人以上のデザイナーや建築家が参加した



三春交流館「まほら」にて岩田司教授。「これまでに全国いくつもの地域のまちづくりを手伝ったなかで、最も成功したのが三春と山形県の金山町。一般的な郊外移転ではなく、三春の中心市街地に移転した大手スーパーの来客は35%が徒歩。周辺の飲食店も来客数が増え、中心市街地は以前より確実に活性化しています」と語る [写真：編集室]



07 農協建築研究会

1964年に設立。会長の大高、副会長の山名以外のメンバーは、大高にとって東大と前川事務所の後輩にあたる岡田恭平、圓建築設計事務所の山田昭、その妻の山田初江など。大高は近代化の波が押し寄せる1960年代初頭の農村を「夜明け前」と捉え、新しい近代社会を、農協を中心とする協同組合を軸に構想し、農協建築をコミュニティの拠点と想定。「花泉農協会館」の設計時には、コミュニティーセンター計画を花泉町に自主提案している。大高は1990年までこの研究会の会長を務めた

08 渡邊定夫

都市計画家、東京大学名誉教授(1932-)。日本各地でアーバンデザインやまちづくりを指導・実践し、人材を育成

09 HOPE計画

建設省(当時)住宅局の補助事業として1983年に創設。Housing with Proper Environmentから名付けられた。地域の住文化に根ざした住まいづくりやまちづくりを、地域が自ら実践するための計画策定費を補助するというもので、三春は事業がスタートしたその年に取り組んだ第一世代

素晴らしい伝統があるのに、なぜコルビュジェの真似をするのか」と問われたことだった。その問いから、自分たちの足元、すなわち現実の日本の都市や、日本の風土に根ざしたオリジナルなものを追求することに注力すべきだと自覚した。

このことは、コルビュジェや前川の思想を相対化し、自らの方法論を模索することの始まりを意味した。大高は1962(昭和37)年に独立し、目指す建築の方法論のテーマとして「PAU」を掲げる。Prefabrication(工業化)、Art & Architecture(芸術化)、Urbanism(都市化)の頭文字から取ったものだ。

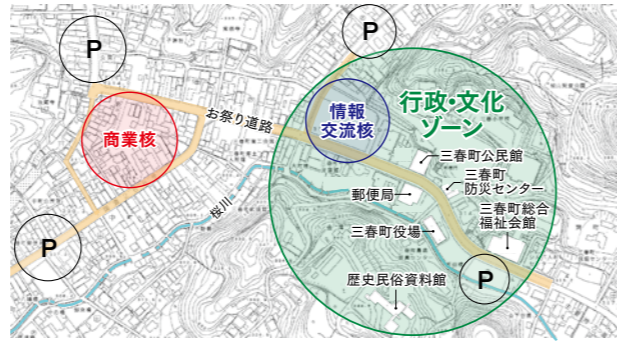
故郷に能力の輪をつくる

「坂出市人工土地」(1968-1986)や「広島市基町団地」(1970-1978)などで建築家としての名声を高めた大高が、故郷にかかわるようになったのは1976(昭和51)年、三春まちづくり協議会主催の講演会に講師として呼ばれたことがきっかけだ。

講演会を企画した伊藤寛は、農林中央金庫を辞して故郷三春の農協に移り、請われて1975(昭和50)年に助役に就任。のちに町長を6期24年務めた人物だ。同郷の大高のことは農林中央金庫時代に山名元から聞いていた。山名は大高と東京帝国大学第二工学部建築学科の同期で、清水建設を経て、農林中央金庫の調査役となっていた。

大高が「片岡農業協同組合」(1962)を皮切りに、農協建築に深くかかわるようになったのは、山名の存在が大きい。大高と山名は同志を集めて「農協建築研究会」⁰⁷を設立し、農協建築のあり方について研究も重ねた。大高は学生時代から、共産主義と民主主義の間を埋めるものとして協同組合主義に関心をもっていったという。

そのころの三春は、中心市街地整備や新市街地



左 | 三春城下町(寛政期)の土地利用構成。東に武家地、西に町人地が広がる(「三春町地域住宅計画策定に関する報告書」建設省住宅建設事業調査・1984年3月より)

上 | 三春町市街地整備基本計画より、土地利用構成の考え方。城下町の敷地割りを活かし、東に歴史・文化・行政拠点と交流・情報拠点を、西に商業拠点を配して、これらを表通りで結ぶ「2核1軸構想」に沿ってまちの整備が進められてきた(三春町「市街地整備基本計画」1989年より)

整備、ダム周辺整備などの事業を抱え、まちづくりの指針を必要としていた。一方、中心市街地では表通りの拡幅に際し、魅力的なまちなみや商店づくりに向けた気運が地元商業者を中心に高まり、町民参加のまちづくり組織として、協議会が設立されたばかりだった。伊藤は旧知の山名と同郷の大高に、三春のまちづくり計画の指針となるような講演を依頼。大高は「風格のあった三春町というものを見直す必要がある」と講演で力説し、「それが、その後30年余の三春町のまちづくりを貫く指針になった」と伊藤はのちに振り返っている。

この講演会を機に、大高は三春とのかかわりを深めていき、設計を手がけた「三春町民体育館」が1978(昭和53)年に、「三春町歴史民俗資料館・自由民権記念館」が1982(昭和57)年に完成。岩田教授は「質の高い公共建築を得て、また、それによって三春というまちが評価され、三春のまちづくりに弾みがついたと思います」と話す。

大高は1980(昭和55)年に伊藤が町長に就任して以降は都市計画顧問としても三春にかかわるようになる。ただし表立って行動することはなかった。信頼できるさまざまな専門家を紹介し、役場の職員や地元の商工業者、工務店などと結びつけることに努め、「能力の輪をつくる」というまちづくりの持論を故郷で実践していく。

大高がまず紹介したのが、都市設計を専門とする東京大学都市工学科助教授(当時)の渡邊定夫⁰⁸だ。中心市街地をどのように整備していくかを検討するには、歴史的に形成されてきた都市構造や資源を読み解くことが必要だと考えたのだ。渡邊は研究室の学生たちと三春のまちを細部にわたって調査し、その成果は1983(昭和58)年の「HOPE計画(地域住宅計画)」⁰⁹の取組みで展開される。

大高はまた、1982年に創設された「三春町建築

賞」の選考委員長に、東京帝国大学第二工学部建築学科の1学年後輩にあたる建築史家の村松貞次郎¹⁰を紹介した。さらに1983年には、学校建築を得意とする建築計画の研究者であり東洋大学助教授(当時)の長澤悟¹¹を誘って「学校建築研究会」を立ち上げ、町内の学校建築の設計者に山下和正や鈴木恂、香山壽夫などを選んだ。彼らは教師や地域住民の意見を丹念に聞き、議論を重ねながら、個々の学校建築の設計にあたった。

HOPE計画によるまちづくり

岩田教授は1980年ごろ、東京大学渡邊研究室の学生だったときに初めて三春を訪れた。「研究室の調査により、三春の中心市街地は寛政時代(1800年ごろ)に行われた町割りをもとに形づくられていることがわかりました。そのため神社仏閣が多く、裏道を中心に土蔵も多く存在していました」。

まちづくりは渡邊の指導により、「HOPE計画」の考え方をもとに方向付けがなされた。HOPE計画の目指すところは「地域の特性をふまえた質の高い居住空間の整備」「地域の発意と創意による住まいづくりの実施」「地域住宅文化、地域住宅生産などにわたった広範な住宅政策の展開」の3つ。岩田教授は「三春には、まちづくりや住まいづくりを地域住民が自らの手で実践できる素地がそろっていました」と話す。「三春大工という言葉があり、古くから周辺地域を含めて普請の多くを三春大工が請け負っていました。また調査時、人口2万人のまちにしては設計事務所も多く、5つ存在しました。それで、地元の設計士や大工と一緒にHOPE計画に取り組もうとなったのです」。

HOPE計画の策定や推進にあたっては「三春町住宅研究会」が大きな役割を果たした。1984(昭和

59)年の設立の際は地元の建設関連業者すべてに声をかけたという。「専門家の指導、住民参加とともに、地域の建築の専門家である建設関連業者のまちづくり全般への参画は、いまでこそ多くの地方公共団体のまちづくりにおいて一般的に行われていますが、当時としては画期的なものでした」。

中心市街地では、「お祭り道路」と呼ばれる表通りの拡幅と沿道整備が計画されるなかで、「三春らしさ」を見極めることから着手。渡邊研究室の学生と三春町住宅研究会による調査結果は「三春町地域住宅計画策定報告書」に盛り込まれた。この報告書では「道の性格を活かした中心部のまちづくり」を提唱し、「表通りは平入り¹²のまちなみを目指す」「ヒューマンスケールで藏並みを活かした裏道」「落ち着いた歴史を感じさせる参道」「商業核の形成」などの具体案を挙げている。岩田教授は「まちなみの将来像の検討・共有のために200分の1の模型もつくって公民館に展示したら、子どもたちが喜びましたね。いま50歳前後の住民にはそのイメージが残っているようです」と語る。

着々とまちづくりが進むなかで、大高は「三春交流館『まほら』」の設計に取り組んだ。「大高先生に呼び出されて、軒高などのモジュールの相談を受けました。まちづくりを横目で見ていて、それに合わせるためです。常にまちに寄り添う気持ちを感じました」。

交流館は2003(平成15)年に完成。「2核1軸構想」による中心部のまちづくりの「情報・交流核」と位置づけられ、大高が2010(平成22)年に他界した2年後、もうひとつの「商業核」にあたる場所に、地元発祥の現・大手スーパーが移転した。30年以上前に計画された「商業核の形成」が実現をみただ。「最初の基本計画からぶれず、こんなに長く息づくまちづくりは他にないと思う」と岩田教授。その計画はいまも、大高の建築作品とともに生きている。

大高正人 略年表	
1923(大正12)年 福島県三春町に生まれる	1965(昭和40)年 「花泉農協会館」竣工。「千葉文化の森計画」(-1970年)
1944(昭和19)年 東京帝国大学第二工学部建築学科に入学	1967(昭和42)年 「千葉県文化会館」竣工
1949(昭和24)年 東京大学大学院修了。前川國男建築設計事務所に入所	1968(昭和43)年 「坂出市人工土地」1期竣工(-1986年)。「南郷町農協会館」
1962(昭和37)年 大高建築設計事務所を設立。「片岡農業協同組合」竣工	1969(昭和44)年 「栃木県庁舎議会議棟」竣工
1964(昭和39)年 農協建築研究会会長(-1990年)。「全日本海員組合本部会館」竣工	1970(昭和45)年 「広島市基町団地」1期竣工(-1978年)
	1974(昭和49)年 「千葉県立美術館」1期竣工
	(-1980年)
	1976(昭和51)年 「筑波新都市記念館(洞峰公園レストハウス)」竣工
	1977(昭和52)年 「多摩センター駅前広場・ペDESTリアンデッキ」(-2000年)
	1978(昭和53)年 「三春町民体育館」竣工
	1979(昭和54)年 「群馬県立歴史博物館」竣工。「みなとみらい21基本計画」(-2002年)
	1982(昭和57)年 「三春町歴史民俗資料館・自由民権記念館」竣工
	1984(昭和59)年 「神奈川県立近代美術館別館」「福島県立美術館」竣工
	1990(平成2)年 「三春ダム周辺修景基本計画」(-1995年)
	1994(平成6)年 「三春ダム管理所」竣工
	1995(平成7)年 「三春ダム資料館」竣工
	2003(平成15)年 「三春交流館『まほら』」竣工
	2010(平成22)年 87歳で逝去

10 村松貞次郎

建築史家、東京大学名誉教授(1924-1997)。技術史をもとに近代建築を調査・研究し、日本の近代建築史学を確立した

11 長澤悟

建築計画学者、IEE教育環境研究所所長、東洋大学名誉教授(1948-)。「福島県三春町における一連の学校計画」で日本建築学会賞(業績)を受賞

12 平入り

棟木と直角の面を「妻」、平行の面を「平(ひら)」といい、平に入口があることを平入りという。全国を回って調査した岩田教授によると、「城下町はどこも平入りのまちなみ。東北ではたとえば奥州街道沿いは見事に妻入りですが、城下町だけは平入りです」



平入りが連続する三春のまちなみ
[写真：編集室]

岩田 司 いわた・つかさ
東北大学教授/1957年兵庫県神戸市生まれ。1982年東京大学工学部都市工学科卒業。1989年同大学院工学系研究科都市工学専門課程修了後、建設省(当時)建築研究所に入所。2005年より筑波大学大学院システム情報工学研究科教授(連携大学院)を併任。2015年より東北大学災害科学国際研究所教授。

長井美暁 ながい・みあき
編集者、ライター/山形県出身。日本女子大学家政学部住居学卒業後、『室内』編集部所属。2006年よりフリーランス。

MAP 2

21

三春町歴史民俗資料館・自由民権記念館

1982年

設計 | 大高建築設計事務所

地域の風景となる建築

まちの歴史や文化を伝える資料館。併設の自由民権記念館では、板垣退助とともに活躍した河野広中など、三春出身の民権運動家を紹介する。

斜面地の高低差を利用し、建物は分散配置している。隣に平坦な造成地もあったが、大高は竹と雑木が密生していたこの北斜面をあえて選んだ。竣工の数年後に発表した文章に、「こういう敷地は通常ブルドーザーを入れて整地してから建築にかかるものであるが、そうすると、切りと盛りのきたない傾面がまちに露出する。きたないばかりでは無く、歴史的な地形がそこなわれてしまう。私は高低差のげいしい此処に、その地形のままに資料館を建て、地形を損なわないように道路の設計をした」と記している。アルミ製の屋根はいぶし銀色に電解着色を施し、外壁は黄土色のせり器質タイル。これらもまちの景観との連続性を意識したものだ。

工事中、徳川時代はここに武家屋敷があったらしいことがわかり、雑木林のなかに樹齢300年程度のシダレザクラが見つかった。大高は先の文章に続けて「これが資料館の外構に残って、春にはらんまんの花をつける。こうして、建築と町との関係の見本を造ることに成功した」とも述懐。そのシダレザクラは表通りから資料館を見たときにきれいに目に入る。資料館の活動によって町民がまちの歴史を意識するようになり、歴史と教育のまちづくりが展開された、という後日談もある。



1



2

- 1 屋根形状によるダイナミックな架構を体感できる2階の展示室。玄関は1階
- 2 角の飛び出ているところが休憩室。開館当初はここから安達太良山を望めたという
- 3 正面アプローチ。車椅子利用者が2階の展示室へ出入りしやすいように、竣工時から裏玄関も用意。左は収蔵庫、右手前は別棟の自由民権記念館



3

MAP

07

三春町民体育館

1978年

設計 | 大高建築設計事務所

大屋根体育館のひとつ

大高が三春につくった最初の建物。「村井学園体育館」(1977)や「洞峰公園体育館」(1980)などで同時期に試みていた大屋根体育館のひとつだ。「千葉県立美術館」(1974-1980)の展示棟に似た長方形の角を落とした平面に、切妻の金属屋根を架けている。その姿を眺めながら岩田教授曰く、「大高先生の作品は大きな屋根が特徴だから、私たちは先生のことを陰で“大屋根正人”なんて呼んでいたのですが、これは実に大屋根先生らしい作品です」。大高は、陸屋根が都市の景観を混乱させたとして、日本の風土に根づく傾斜屋根を創造的に継承することを志向していた。

アリーナはコンクリート柱を長手両側の中央に配置して大空間を実現。大棟部分にトラス状のボックスを鉄橋のように架け渡し、そこにトップサイドライトを組み込み、大屋根の意匠性に構造の合理性や自然採光の機能性を結びつけている。「中心性をうまく利用した設計」と岩田教授。

敷地はまちの南に位置する運動公園内にあり、中心市街地からは車で5分前後。大高は森のなかに立つような体育館にしたいと、公園内の配置計画からかわることを望んでいたが叶わず、また、竣工当初は周囲の植栽もなかったため、自ら設計した建物ながら良いイメージをもっていなかったという。しかし、木材の目透かし張りによる内装は、森の雰囲気を感じさせている。また、アリーナ側に設けられた隠し通路のようなギャラリーも親密な空間で、トップサイドライトから降り注ぐ光とあわせて、全体に明るく優しい印象の建物だ。



1



2

- 1 外装はアルミニウム瓦葺きの屋根とレンガタイル打ち込みの外壁。屋根は7寸勾配
- 2 ロビーの壁を彩る「紅色」は大高が好んで用いた色
- 3 アリーナ。竣工から30年余を経た2011年の東日本大震災の際も損傷はなく、避難所として活用された



3

三春交流館「まほら」

2003年

設計 | 大高建築設計事務所

「三春の宝」と呼ばれる大高建築の集大成

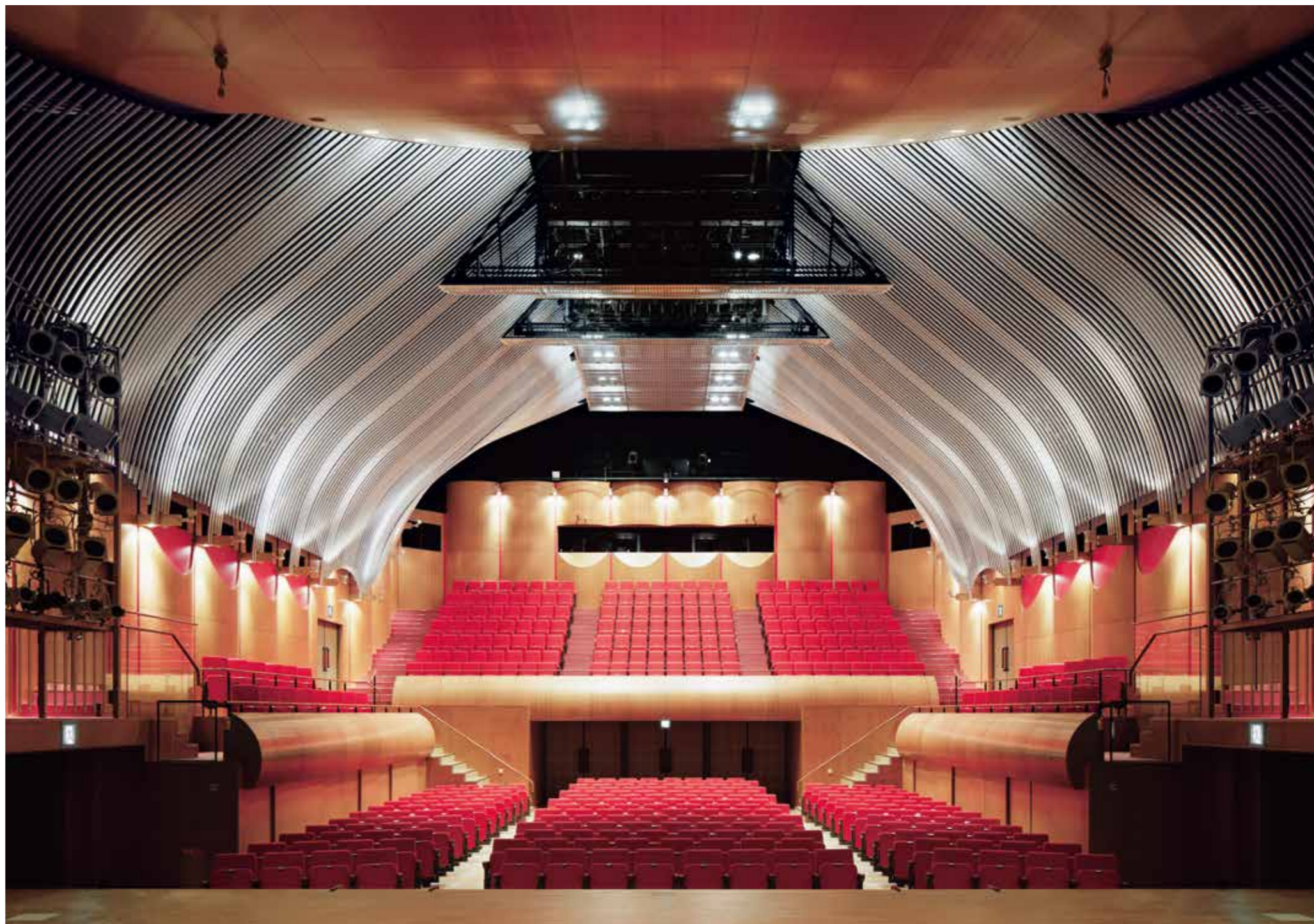
大小のホール、会議などにも利用できる楽屋2室、サークル活動や各種講座のための学習室2室、舞台付きの和室を備える生涯学習施設。「まほら」は古語で、「まほらま」や「まほろば」と同じように、素晴らしい場所、秀でた国を意味する。

中心市街地の再活性化を促すことを目的に建設計画が立ち上がり、町民参加による検討委員会で約10年かけて建設構想が練られた末に完成した。検討委員会には大高も参加し、既設の公民館をどう使い、どのような生涯学習活動を行っているのかなど町民と意見を交わし、設計に活かした。利用目的を固定しない汎用性の高い部屋で構成、学習室などを利用する地元の文化サークル活動のためのロッカーの設置などはその表れの一部だ。「町民と議論するために、大高先生は何度もスタッフに絵を描かせていました」と、行政側で当時かかわった三春町教育委員会生涯学習課の佐藤哲郎主幹は振り返る。

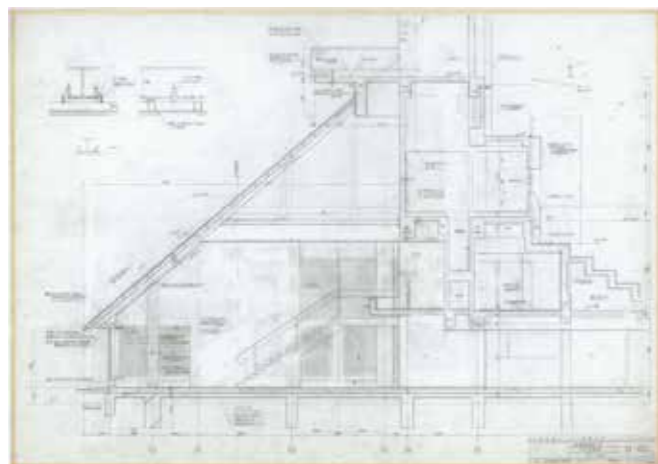
大高は発注者である行政側にも、各部屋の目的や利用人数などの想定を詳しく求めた。施設の目玉となる「まほらホール」の規模は、1,000人収容という議会案に対し、大高は箱物行政としてではなく、住民の視線で考え、三春で一番多く人が集まるのが神社総代の会合で500人ということから、400人収容が適切だと強く主張。結果として現在、ホールだけではなくどの部屋も稼働率は高い。「それまでの設計経験から、使い勝手や施設稼働率、メンテナンス、維持管理費といったことが十分に考えられている」と佐藤主幹。

建物だけではなく家具や備品なども大高事務所が設計を手がけた。大高は生前、「三春交流館は私の仕事の総決算」と意気込みを周囲に語っていたという。事務室で使われているハーマンミラー社製の打ち合わせテーブルや椅子は大高事務所から譲り受けたもので、大高の三春への強い思いをうかがわせる。

- 1 「まほらホール」の1階は平土間と可動椅子により、さまざまな利用形態に対応。音響や舞台、照明などそうたる専門家との協働で設計され、特に音響面はプロの音楽家から高い評価を得ている
- 2 ホワイエ縦断 断面詳細図 [所蔵：文化庁国立近代建築資料館]
- 3 ホワイエの広さは430㎡で、約150席の椅子を並べられる。正面奥が「まほらホール」の出入り口
- 4 交差点に面した休憩コーナーは待ち合わせ場所としても使われることを意図し、ガラスを多用して明るく、外から中の様子もわかる。大高は設計時に「ここは東京の銀座でいえば4丁目」と話したほか、新宿サザンテラスを好きな場所の一例に挙げ、休憩コーナーや交流広場のあり方に力を入れていたという
- 5 小ホールは100席程度の規模だが、「まほらホール」と同等の音響を誇る



1



2



3



4



5

テーマ2

山間のまちに溶け込む蔵 改修・転用で人を呼び込む

取材・文 | 磯 達雄
写真 | 小松正樹

- 1 「三春きたまち蔵」。左手前は観光案内所「TENJIN」。奥に見える蔵はアニメ制作などを行う会社「福島ガイナ」のスタジオで、通常、内部は非公開だが、時期によっては展示公開が行われることもある
- 2 「三春なかまち蔵」の外観。3棟からなり、手前から物産や土産品を販売する「花かご」、ナポリタンが自慢の「カフェブリキヌ」、ジャズが楽しめる「Café遊楽」が並ぶ
- 3 「カフェブリキヌ」の2階。壁のペイントや家具が雰囲気を高める

三春といえば桜の名所として有名だ。花が咲く春季には、遠くからも大勢の観光客が押し寄せる。しかし、まちでは1年を通じて、人を呼び込みたい。季節を問わずにまちの魅力を高めるものとして期待をかけられているのが、まちの中に点在する蔵づくりの建物だ。倉庫蔵や座敷蔵として建てられたものが、店舗やミュージアムに変わることによって、まち歩きの訪問者を楽しませるスポットとなっている。

三春交流館「まほら」の北側、道路を挟んだ向かい側に2018（平成30）年5月にオープンした施設が「三春きたまち蔵」だ。2棟からなり、手前にある土壁の蔵は観光案内所「TENJIN」、奥に見える白壁の蔵は、アニメ制作などを行う会社「福島ガイナ」がサテライト・スタジオとして使用している。

これに先立って、2014（平成26）年には、「三春なかまち蔵」が完成している。こちらは3棟の蔵がずれながら縦に並んでいる。手前の蔵は三春の物産や土産品を販売する店舗、奥の2棟は飲食店だ。そのうちのひとつを昼時に訪れると、観光客のグループがテーブルのほとんどもを埋めており、名物のランチと蔵の中の洒落たインテリアデザインを楽しんでいた。

こうした蔵を改修して転用した観光スポットが、三春町の中心部には数多く点在している。

曳家して展示施設へ転用 そこから始まった行政の取組み

まちづくりに蔵を活かすきっかけとなったのは、1989（平成元）年に始まった、1983（昭和58）年策定の「HOPE計画」（8ページ参照）を実現するための市街地整備基本計画だった。この事業ではまちの中心部を通る表通りが拡幅され、それに伴い沿道の敷地で建物の建て替えが行われることになった。そのなかにあった2棟の蔵がとて立派で、これをなくしてしまうのはあまりにも惜しい。そこで当時の総理大臣、竹下登が提唱し実現したふるさと創生事業の交付金を使い、曳家して展示施設として公開することにした。それが三春郷土人形館である。

建物は軒を接して立ち並ぶ2棟からなり、いずれも江戸時代末期から明治期にかけて建てられた蔵を改修転用したものだ。内部ではこの地域でつくられてきた世界の人形コレクターの間で有名な、歴史的に唯一ダイナミックな動きを紙人形（張り子人形）で表現した「三春人形」やこけし、郷土玩具の類を展示している。観光客が立ち寄るスポットであり、桜川に面して蔵が並ぶ様子は、写真を撮ってSNSに投稿したくなる風情である。

市街地整備基本計画では表通りだけでなく、裏通りの整備も目指された。大通りから少し奥に入ったところに人が楽しく歩ける道を整備しようとの狙いである。そうして出来上がったのが、三春交流館「まほら」から三春町文化伝承館へと抜ける磐路通りだ。ここでも近くにあった蔵を通り沿いのポケットパークに面したところまで曳家し、それが1995（平成7）年に「蔵のカフェ・フロリアン」としてオープンしている。

こうした行政の取組みが、波及効果をもたらす。ま



2



3



1



三春郷土人形館の入り口。分厚い扉は気密性や防火性を高めるために段状に召し合せている。内部では三春人形や三春駒を展示している



1

ちの住民にとって蔵は当たり前の存在であり、開口部が小さいなど日常的な使用には不便な面もあり、やっかいもの扱いする向きもあったのだが、その良さがあらためて認識されるようになっていったのだ。「自分たちではなかなか気づかなかったけれども、訪れる観光客に接して、外から見るとこれもまた大事なものなんだと多くの町民が感じてくれるようになりました」と三春町産業課の新野徳秋課長。

さらには民間の事業によって蔵を改修して営業する「みはる味処 山惣」や「むらかみ亭」といった飲食店もオープンした。まちの観光資源として、蔵は三春町の中心部で息づいている。

大火に見舞われてきたまちの歴史 中にある大切なものを守るために

三春町は明治時代になって養蚕で栄えた。蔵が多い理由のひとつがそれだ。そしてもうひとつの理由は、三春の気候と関係がある。「このまちは阿武隈山系の裾に位置していて、標高はそれほど高くないが、冬の季節には強い西風が吹く。どこかで火事が起こると、瞬間に広まってしまう。歴史上、そういう大火に幾度も見舞われている。それで三春の商家では、大切な財産を蔵に入れてきちんと守るようになったのです」。新野課長はこのように説明する。

三春の蔵の特徴として、敷地の裏側にあることが挙げられる。蔵のまちとしては宮城県みやぎけんの村田町や埼玉県の川越市が有名だが、それらのまちで見られるのは、表通りに面して立ち、裏側の蔵なども含め表の店も蔵としてつくられた、いわゆる店蔵だ。そのため蔵でありながら開放性を備えている。一方、三春の商家では、多くの城下町や宿場町で見受けら



2

れるように、表通り側には木造をそのまま表した店舗を建て、その裏側に倉庫蔵や座敷蔵を設けるといって建て方を採っている。従って、開口部はあくまで小さく、火災から中のものを守るという蔵本来がもつべき性能がその姿に表れているものが多い。

しかし残念ながら地震に対しては構造そのものは強いが、弱い一面も見せる。2011(平成23)年の東日本大震災に際して、軟弱地盤では若干傾いたり、また漆喰塗りの外壁は脆く、剥離する、亀裂が入るなどの被害を生じた。美しい三春の風景を形成する土蔵の修復、特に美しい伝統技能の集大成である漆喰塗りの修復には、多額の費用がかかる。愛着はあるものの修復することが難しく、解体されてしまった蔵も少なくないという。

それでも、まちの中心部を歩けば、商業施設などで公開されている蔵以外にもたくさんの蔵が目に入る。まちのなかの風景に、当たり前のように溶け込んでいるところが三春の蔵の良さだろう。そんな楽しみを味わいながら、三春のまちを歩いてみよう。

- 1 桜川に面して3つ並ぶ蔵のうち、左と中央が三春郷土人形館。さらにその右に1棟はさんで飲食店の「むらかみ亭」が立つ
- 2 磐州通りのポケットパークに面して立つ「蔵のカフェ・フロリアン」。磐州通りは、HOPE計画を出発点として整備された道だ。この一帯には、もともと裏道がなく、裏山からの雨水が直接住宅地に流入していた。そこで住環境改善と安全対策、歴史的建造物(三春町文化伝承館)を活用した施設整備を目的に事業を実施。表通りやポケットパークと有機的に結びつけて回遊性を高めている。道幅は小型重機が通れるよう約4mと広いが、側溝部分に濃い色味の石を配して視覚的にしぼりこむことで、ほどよい身体感覚を生み出している。また、通り沿いの住民が互いにまちづくり協定を締結し、住環境の整備改善と景観形成に努めている

磯 達雄 いそ・たつお
建築ジャーナリスト/1963年埼玉県生まれ。1988年名古屋大学工学部建築学科卒業。1988-1999年日経アーキテクチャ編集部に勤務。2002年よりフリックススタジオ共同主宰。現在、桑沢デザイン研究所および武蔵野美術大学非常勤講師。

三春 建築めぐり

MIHARU

参考
 ・建築思潮研究所『公共の宿』建築資料研究社、1995
 ・東京大学大学院新領域創成科学研究科 社会文化環境学専攻 空間計画研究室UDCK『三春のまちづくり』2009.3
 ・Find!三春 (http://miharu-koma.com/) 2019.4.19アクセス
 ・三春町 (http://www.town.miharu.fukushima.jp/) 2019.4.19アクセス
 ・三春町「三春町における市街地整備の取組みについて」
 ・三春町歴史民俗資料館・編『みはるの里：城下町の文化財を尋ねて』三春町歴史民俗資料館、1993

おことわり
 04-21ページの作品名称は文化財指定名称とし、ほかは原則として2019年5月時点の施設名称を使用しています。

三春町へのアクセスは、鉄道利用なら東北新幹線を郡山駅で磐越東線に乗り換えて、そこから三春駅まで13分。自動車なら郡山から30分弱で着く。

まずはまちの中心部をめぐる。現在は城山公園になっている丘が、かつては三春城の本丸、二の丸だったところ。その下に武家地がめぐり、そのさらに外(西)に町人地が延びていた。現在の中心市街地もこれを受け継いでおり、限られたエリアに行政、文化、商業などの施設が集中する。大高正人が設計した三春交流館「まほら」や歴史民俗資料館があるのもここだ。現代建築だけでなく、寺社や蔵づくりの建物もある。表通りだけでなく、そこから少し奥に入った裏通りも景観を意識し

た整備が行われているので、徒歩で回るのがおすすめだ。

魅力的な建築が集まるもうひとつのエリアが、さくら湖の周辺だ。三春ダムの建設に伴い、学校のほか展示施設や研修施設などがこのエリアに整備された。

また三春といえば、三春駒や張り子人形など郷土玩具が有名だが、その発祥地は現在の郡山市にある。かつて三春藩により保護されてきた工人たちの集落、高柴デコ屋敷だ。今も古い民家を活かした製造・販売施設が並んでいる。少し離れたところに位置しているが、足を伸ばしてみたいかがだろうか。

写真 | 小松正樹(特記以外)

01 三春町立岩江小学校

設計 | 不詳
 改修設計 | 山下和正建築研究所
 竣工 | 1964年
 改修 | 1985年
 田村郡三春町上舞木大谷ツ24
 「学校建築研究会」が最初に改築を手がけた学校建築。建築の専門家だけでなく、教育学者、学校関係者、地域の住民も参加し、教育空間のあり方を検討するという、当時としては先進的な取組みが行われた。岩江小学校は三春町で初めてオープンスペースをもつ校舎として計画され、その後、生徒数の増加に伴う増築時にも研究会がかかわり、現在の姿となった



02 福島さくら遊学舎・三春まちづくり公社

(旧桜中学校交流施設)
 設計 | 香山壽夫・環境造形研究所
 竣工 | 1991年
 田村郡三春町鷹巣山213
 ダム建設によって水没する中学校の統合を機に計画された学校。中庭を囲むコの字型の配置計画、教科教室型の運営方式にあわせた教室配置、RCの壁に木造の小屋がのる複合構造が特徴。2013年に閉校後、三春まちづくり公社が施設を管理・運営。みはる観光協会の拠点として、また、アニメ制作会社の福島ガイナが入居し、制作スタジオとアニメミュージアム(写真右)として活用。まちとコラボレーションしたアニメ制作も手がける。アニメミュージアムは2019年4月より完全予約制(写真右:編集室)



03 三春の里 田園生活館

設計 | Team Zoo 齋十一級建築士事務所
 +阿部節子生活空間工房+空間工房101
 +ぼう建築計画
 竣工 | 1994年
 田村郡三春町西方石畑487-1
 ダム周辺の環境整備の一環として、ダム建設で生じた残土と岩を用いて整地。当初計画していた工芸村から発展し、田園生活の美しさや豊かさを発信・普及する拠点施設として整備された。なだらかな起伏をもつ敷地には、本館(宿泊棟)、浴室棟(現在は飲食店として利活用)、ダムに水没する農家建築を移築した食堂棟、コテージなど木造の建物がゆったりと配置され、混構造、HPシェル、ツーバイフォーなど、さまざまな木造表現が試みられている



04

▶p.06参照

三春ダム管理所・資料館

設計 | 大高建築設計事務所
竣工 | 1994年(管理所)、1995年(資料館)
田村郡三春町西方中ノ内403-4

06

三春滝桜

田村郡三春町滝桜久保115
三春藩主や領民に愛されてきた、樹齢推定1,000年超のベニシダレザクラの巨木。樹高13.5m、根周り11.3mを誇り(2019年時点)、日本三大桜に数えられる。桜の樹として初めて天然記念物に指定された名木で、薄紅色の小さな花が、流れ落ちる滝のように見えることから「滝桜」の名がついたとされる。ほかにも三春町内には、約2,000本のシダレザクラがあり、まち全体が桜の名所となっている [写真: 編集部]



07

▶p.11参照

三春町民体育館

設計 | 大高建築設計事務所
竣工 | 1978年
田村郡三春町貝山泉沢100

09

深田和集会所

設計 | 岩田司+土館善三建築研究所
竣工 | 1993年
田村郡三春町深田和151-2
深田和団地の一角に設けられた、深い軒をもつ木造平屋建ての集会所。背後に望む山並みに調和した特徴的な屋根は、鶴が舞う姿を連想させる。屋根の軸線の先には、別名「舞鶴城」と呼ばれた三春城がかつてあった。深田和団地は、建築協定と緑化協定の策定により、緑道側に玄関を設けることで、緑豊かな街路と街区を形成している



11

彦治民芸

竣工 | 1600年代
(江戸時代初期)
改修 | 2019年
郡山市西田町高柴館野80-1

戦後、「高柴デコ屋敷」で唯一、三春駒を木彫りから着色まで手がけてきた民芸店。築約400年を超す茅葺き屋根の建物は、現在、店舗兼人形製作の作業場となっている。以前は帳場部分に囲炉裏があり、梁の上に並ぶ江戸期につくられた張り子の連磨が、真っ黒に煤をまわっているのはそのため。2019年、屋根を部分補修する「差し茅」工事を実施。茅葺きだった煙出し部分はトタンに張り替え、「三春駒」があしらわれている [写真左・右: 編集部]



05

三春町中郷学校 (三春町立中郷小学校、三春町公民館中郷分館、三春町立中郷幼稚園)

設計 | 鈴木恂建築研究所
竣工 | 1990年
田村郡三春町柴原新久保235
「さくら湖」のシンボル・春田大橋を望む高台に立つ、小学校、幼稚園、公民館、体育館が併設されたコミュニティスクール。ダム建設による地区の再編を機に、学校教育と生涯教育、まちづくりはひとつという願いのもとに学校建築研究会もかわかり計画された。それぞれの施設は連絡通路で結ばれており、敷地のレベル差を活かした空間も特徴



08

三春町町営住宅 かつきばし団地

設計 | 渡邊定夫(現・東京大学名誉教授)
+ 東京大学都市工学科渡邊研究室
+ 栖建築設計工房+三春設計舎
竣工 | 1989年(第1期)、1991年(第2期)
田村郡三春町平沢担橋91-5、担橋1-5-4
旧国鉄のストックヤードに計画された、線路を挟んで三春駅に直結する南北2棟ずつの計4棟、計56戸(すべての住戸プランが異なる)からなる鉄筋コンクリート造3階建ての公営住宅団地。HOPE計画推進事業のひとつとして、1987年から事業計画がスタート。公営住宅では初の本格的なスケルトン・インフィル化により、内部をすべて木構造とし、施工、メンテナンスを地元工務店でも可能とした



10

旧栗田中学校交流施設

(旧・三春町・船引町学校組合立栗田中学校)
設計 | 近藤進男建築設計室
計画指導 | 長澤 悟
竣工 | 1994年
田村郡三春町熊耳ハツ田213
学校建築研究会が計画に参加した、ふたつのまちの学校組合立による中学校。北に安達太良山を望む高低差のある敷地に立つ。敷地のレベル差を活かした空間構成がとられ、敷地1層分の高低差を利用してつくられた中庭は、野外劇場として使われていた。2015年に廃校となり、まちが管理している



12

龍福院

建立 | 1645年
再建 | 文政年間
田村郡三春町荒町160
開創1371年の寺院。三春藩主秋田家の菩提寺のひとつで、秋田氏の三春入部に伴い常陸穴戸(現在の茨城県笠間市)から三春城下に移された。大屋根を戴いた豪壮な本堂は、有事の際、藩士が立てこもり防戦する機能を備えた出城建築の要素が多いといわれ、戊辰戦争では官軍の病院に、明治時代には自由民権運動の演説会場にもなった。本堂裏手の斜面の墓地には、三春ゆかりの文化人の墓も多く、大高正人もここに眠る



14

▶p.17参照

磐州通り

設計 | 岩田司+三春設計舎
竣工 | 1999年
田村郡三春町大町地内

15

みはる味処 山惣

設計 | 不詳
竣工 | 1870年代初め
改修 | 2001年
田村郡三春町北町9-2
表通りの建物が撤去されたのを機に、その裏手に立つ蔵を借り受けオープンした郷土料理店。「店舗に活用したい」と、三春中の蔵を探していた」と、山惣主人の松村氏。配膳のために階段を増設した以外は、喜多方から大工を呼び寄せ、ほぼ往時のままに修復。蔵は呉服店の所有で、明治初期の建築と伝承され、壁には、着物を吊り下げていた金物が残る



16

▶p.14参照

三春きたまち蔵(観光案内所「TENJIN」/ Atelier Cocon.)

設計 | 不詳
改修設計 | 三春設計舎
竣工 | 1940年(現・Atelier Cocon.)、1947年(現・TENJIN)
改修 | 2018年
田村郡三春町北町10

17

▶p.14参照

三春なままち蔵

(一ノ蔵「花かご」、二ノ蔵「カフェー プリキイヌ」、三ノ蔵「Café 遊楽」)
設計 | 不詳
改修設計 | 三春町住宅研究会
竣工 | 1966年(現・一ノ蔵、現・二ノ蔵)、1967年(現・三ノ蔵)
改修 | 2014年
田村郡三春町中町4

13

三春町文化伝承館

設計 | 不詳
竣工 | 1895年
田村郡三春町大町82

明治期に生糸問屋として莫大な財をなした初代・吉田誠次郎の自邸。一時は取り壊す予定だったが、土地と建物をまちが取得し保存。建物を一般公開している。漆喰の土塀に囲まれた敷地には、数寄屋造りの母屋と2つの蔵が立つ。黒檀や天井に張られた節目の黒い薩摩杉など高級材がいたるところに用いられている。なかでも数蔵蔵「紫雲閣」の2階は、床柱や落掛に施された龍の彫り物、さらに柱・天井とも漆仕上げという贅を尽くしたつくりだが、震災による損傷で現在(2019年4月現在)は閉鎖中



18

みはる番館

設計 | 結建築研究室
竣工 | 2002年
田村郡三春町大町32-1
中規模店舗の跡地における商業機能強化と、まちなか居住推進を目的に、三春まちづくり公社によるTMO事業として建設された店舗と賃貸住宅からなる複合施設。平入りの配置、3階以上のセットバック、道を道路に沿って連続的に建てるなど、まちなみ形成の考え方にもとづいて計画された。「まほら」からもほど近く、まもりある、まちなみを印象づけている



19

▶p.16-17参照

三春郷土人形館

設計 | 不詳
改修設計 | 不詳
竣工 | 江戸時代末期~明治
改修 | 1990年
田村郡三春町大町30

20

▶p.07、p.12-13参照

三春交流館「まほら」

設計 | 大高建築設計事務所
竣工 | 2003年
田村郡三春町大町191

21

▶p.07、p.10参照

三春町歴史民俗資料館・自由民権記念館

設計 | 大高建築設計事務所
竣工 | 1982年
田村郡三春町桜谷5

22

三春町保健センター

設計 | 武澤秀一/
用美強・建築都市設計
竣工 | 1998年
田村郡三春町南町26-1

学校建築にはじまり、中心地のまちづくりが進むなかで、役場を中心とした行政・文化ゾーンに計画された建築。背後の傾斜面を造成して生まれた敷地は、セメント吹き付けの荒々しい断面を見せていたという。設計者は「大地のもの」の形状を、建築によって回復させる」(『新建築』新建築社、1993.3)へく、山側をもちあげたヴォールト屋根を計画。2階のテラスに並ぶアーチ梁は、主体構造であるとともに、雨水を運ぶ樋としても機能する

